

# 「詩編」における神、礼拝、自然

— 翻訳 —

斎藤 康代

まえがき

本稿は Leland Ryken 著 *The Literature of the Bible* (Zondervan Publishing House, Grand Rapids, Michigan, 1974) の第八章 “God, Worship, and Nature in the Psalms” の一部の訳出を試みるものである。

著者リーランド・ライケン（一九四二—）はイリノイ州ウィートン・カレッジの教授で、シルトンや聖書に関する著作が多い。 *The Christian Imagination: Essays on Literature and the Arts* (1981) や *Milton and Scriptural Tradition: the Bible into Poetry* (1984) の編者としても知られている。

本書は、その序文によって知られるように、文学としての聖書について書かれた文学批評書であるが、大学における聖書の文学の講義をもとに、明快な文体で書かれたものなので、分かり易い魅力的な書物となっている。

「詩編」に関心を持つ筆者にとって、この第八章は特に興味深いので現代的な表記の仕方訳出することを試みる。引用されている聖書の箇所の翻訳には、主に「新共同訳聖書」（日本聖書協会、一九八七）を用いたが、「新改訳聖書」（日本聖書刊行会）、口語訳聖書（日本聖書協会）も参照した。

神とはどのような方なのか。この問に対する「詩編」の詩人達の答はさまざまである。言うまでもなく、詩人達は、神学論ではなく、叙情詩を書いたのであるから、その答えは当然、学問的な神学の枠組みではなく、叙情詩の枠組みのなかで検討されなければならない。詩人達は、神についての知識を伝えるというよりも、自らの神体験と、神への応答の体験について書き記すことに関心があつたのである。その上、表現が、叙情詩の特性をすべて備えた詩の形式をとっているのは、叙情詩として理解され、鑑賞されることを求めているからだ。

詩編一三九は、一人の叙情詩人が、彼の神体験をどのように伝えるかを例証する一編の頌詩である。頌詩は高邁な主題を、崇高な様式でうたいあげた叙情詩である。それは通常、主題となるものを称賛する。そして、叙事詩が物語形式の文体のなかで、最高の高潔さ、荘厳さをもつ表現形式であると同じように、頌詩は、叙情詩のなかで、最高の高潔さ、荘厳さをもつ表現形式である。詩編一三九は神に向つて捧げられた祈りである。この詩の一連の構造は明解かつ堅固である。すなわち、神の全知に対する賛美（1—6節）、神の遍在に対する賛美（7—12節）、神の万物創造に対する賛美（13—18節）、そして、神に逆らうすべての者に対する非難（19—24節）により構成される。

この詩の焦点は、神に置かれていて当然だが、意外にも神と話手の両者に置かれている。このことは、賛美の詩編にしばしば見られることである。すなわち、一方では、祈祷の導入句「神よ」が、詩全体の主題を伝えていると言える。事実、この詩には、神への言及が三十六箇処にもある。しかしそれと同時に、神の偉大な属性を、詩人が自らの生活のなかで経験した通りに語るそのなかに、詩人の個人的な要素が顕在化されている。例えば、神の全知は、単なる抽象的な原理ではなく、「わたし」についての神の知識として体験されたものである。同様に、神の遍在は、「わた

し」が神の御前から逃れることはできないことを意味し、また神の創造の力は、神が「わたし」を創造されたことのなかで捕えられているのである。三十六回にわたる神への言及と対応させる形で、話手への言及が四十五回行なわれている。この「汝―我」の状況が強調されることによって、神とはどんな方かを説明するにあたって中心となるのが、関係であるということに、否応なしに目が向けられることになる。

この詩の最初の部分は、神の全知ということを取りあげる。ここでは、まず、一般的に全体に関して述べ、次にそれを支え、例証する特定の細部を示している（1―6節）――

主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知っておられる。

座るのも立つのも知り

遠くからわたしの思いをわきまえておられる。

歩くのも伏すのも探りだし

わたしの道にことごとく通じておられる。

わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに

主よ、あなたはすべてを知っておられる。

前からも後ろからもわたしを囲み

御手をわたしの上に置いてくださる。

その驚くべき知識はわたしを超え

あまりにも高くて到達できない。

この箇処における動詞が、神の知識ということに中心を置いていることが、「探り……知っておられる」「知り」「わきまえておられる」「探りだし」「通じておられる」「すべてを知っておられる」「前から後から……囲み」等に窺える。したがって、詩人にとって「驚くべき」と言われているのは、神の知識なのである。

この詩は、冒頭の部分から早々に、詩的な様式に従って、言葉に装飾を加える傾向をあらわしている。詩句や思想による対句法がこの箇処全体に充ちている。均衡と対照は、「座るのも立つのも」「歩くのも伏すのも」「前から後ろからも」などの数行に歴然と現われている。「交差対句法」——対句を逆に並べて交錯させる作詩技法——は2節と3節に見られ、「坐ること、立つこと」の二つの動作が、次の行では逆の順序で繰り返されている（「歩くのも伏すのも」）。5節では、空間的隠喩を用いて、詩人は、すべてを覆う神の知識を、上からも周囲からも彼を閉じ込めてしまふものに喩えている——「（あなたは）前から後からもわたしを囲み／御手をわたしの上に置いてくださる」。

7節では、次の節で答えが与えられる一つの問いを出すことによって、神の全知から遍在に移行する準備をする。即ち、「どこに行けばあなたの霊から離れることができようか／どこに逃れれば、御顔を避けることができようか」との問いである。これに答えて、詩人は、神のおられる所から逃げ出そうと試みる彼自身の姿を描き出すが、これは、探求の旅の主題の変形である。対句法は、この詩編の他の箇処でも見られるように、この箇処にも充ちている。詩人は、はじめに「たとえ天に昇ろうとも、あなたはそこにいます」（8節）と謳って上方向への逃避を描く。これは下方向への逃避と対比される——「たとえ陰府に身を横たえようとも、あなたはそこにいます」（8節）。その上第三の可能性すなわち、水平方向に、外側へと向う動きも述べられている（9—10節）——

たとえ曙の翼を駆って

海のかなたに行き着こうとも

あなたはそこにもいまし

御手をもってわたしを導き

右の御手をもってわたしをとらえてくださる。

空間における逃げ場という逃げ場すべてを検討し終わったあと、次に、秘密の原型的な媒体である闇へと転じて、光と闇の対照性を効果的に使う（11—12節）——

たとえわたしが

「闇よ、わたしをおおえ

わたしを囲む光よ、夜となれ」と言っても

あなたにとっては、闇も暗くなく

夜は昼のように明るく

闇も、光も、変わるところがない。

詩人の驚きと感嘆に満ちた反応が、そこで「すらも」神から逃れることはできないという詩人の発見によって暗示される。

神の偉大さという論旨にそって、詩人が提示する第三の論点は、万物創造主としての神である。とはいっても、話

手の心を占めているのは、神の天地創造のことではない。人間一人一人に対する神の個別的な関心に重点を置くという先の方針を踏襲して、ここでも詩人は、彼個人を造り給うた神の創造的な働きに焦点をしばる（13—16節）——

あなたは、わたしの内臓を造り

母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

わたしはあなたをほめたたえる、あなたが恐るべく、くすしき方だからだ。

あなたの御業<sup>みわざ</sup>はなんと驚くべきものか。

あなたはわたしを最もよく知っておられる

わたしの体はあなたから隠されることはなかった

秘められたところでわたしが造られ

深い地の底で織りなされた時も。

胎児であつたわたしをあなたの目は見ておられた

わたしの日々はあなたの書にすべて記されている

まだその一日も造られないうちから。

いくつかの隠喩が、詩人の言わんとする所を示唆している。神が、造り、組み立て、目で見ておられたという心象<sup>イメージ</sup>は、胎児の成長に、神が深いかかわりをもって支配されることを暗示している。詩人は、胎内に於ける胎児の神秘的な成長を、古代の神話になぞらえている。その神話では、女性である大地が、生けるものすべての母であり、生けるもの

すべては、その大地の真中で生み出されたことになっている。さらに、もう一つの比喻表現は、神の「書」ということである。この神の「書」というのは、聖書の原型の一つで、ときにはここの箇処のように、神が被造物の運命を定める際に準拠される神の計画を示すことがある。

17節、18節は単に叙情詩の間奏ともいえるものであって、詩人がその特質を賛美してやまない神に対する感情のもった応答を含んでいる。

神よ、あなたの御計<sup>おんはか</sup>らいはわたしにとっていかに貴いことか。

その総計は、なんと数多いことか。

それを数えようとしても、砂の粒より多い。

わたしが目ざめるとき、わたしはなおあなたと共にいる。

この最後に述べられていることは、詩人が初めに述べた神からの逃走<sup>モチーフ</sup>という主題が、神との結合を称賛することへと移行していることを示している。

すでに他の詩編で見てきたように、叙情詩人は、テーマを発展させる過程で、しばしば対比を用いる。詩編一二九は、この展開の方式を例示している。神への賛美から、神を憎む者への非難へと、19節のところから移行が始まる（19—24節）。この移行は、全く論理に反するというわけではない。聖書に一貫して流れる支配的な構想<sup>プロット</sup>の一章として、詩人はここで、善と悪との間の内的葛藤において、自分自身を、神の側に置いている。彼が滅亡を願っているのは、彼自身の敵ではないのである。詩人の闘いは、神の敵を相手とした闘いなのである。詩編詩人に、愛する神と対極をな

すものとして悪を行う人をさげすむようにさせるのは、鮮明な価値意識なのである。

この頌詩は、神が詩人をくまなく点検し、清めてくださるということ静かな調べで終る（23—24節）——

神よ、わたしを究め、わたしの心を知ってください。

わたしを試し、もろもろの思いを知ってください。

わたしの内に悪しき道のあるかないかを見て

わたしをとこしえの道に導いてください。

これらの詩行は、この詩の終局部をまとめた箇所である。その偉大さが称賛されている神に逆らって立つ悪しき者は、すべて滅びるようにと願ったあとで、話手はその原理を自らに当てはめている。先行する詩行の中で、悪人への制裁を求めざるを得なくなったあの厳しい調査と同じ調査にその身を委ねている。この詩の結末はまた冒頭の部分と釣り合っている。神に、「わたしを究めてください」と願うことによって、話手は、神こそその身を究め、この身を完全に知っておられる方であるという冒頭の表明に同意することになる。

詩編一三九は、「詩編」の中で最高位にある叙情詩の一つである。詩編一〇三もまた、その高尚さにおいて、同じような頌詩だと言える。その主題は神の偉大な御業であって、これは「詩編」の継起的テーマである。その構成は、御業を叙述する目録を基盤としており、詩として味わい深いものになっている。この詩編は内省的瞑想の詩で、詩人が、精神機能の一つである魂に話しかけることから始まる（1—2節）——



わたしの魂よ、主をほめたたえよ。

わたしの内にあるすべてのものよ、聖なる御名をほめたたえよ。

わたしの魂よ、主をほめたたえよ。

主の御計おんはからいを何ひとつ忘れてはならない。

話手の内省的な思考過程は、神の恩寵についての彼自身の個人的な経験を熟慮することから始まる。一連の対句的詩句により、詩人は、彼の魂への呼びかけを続ける（3—5節）——

あなたの罪をことごとく赦してください方

病をすべて癒いよしてください方

命を墓から贖あがない出してください方

慈しみと憐あわれみの冠を授けてください方

長らえる限り良いものに満ち足らせてください方

こうしてあなたの若さは、驚おどろのように新たになる。

このように目録は、罪の赦しで始まっており、ユダヤ教とキリスト教に共通の世界観に第一の価値が置かれていることを示している。ここで扱われているのが、霊的、宗教的機能であるから、病の癒しに関して述べられていることは、一つの隠喩として受けとるべきであり、意味の上では、罪の赦しの陳述と対応する。この箇所は、よく吟味された

対句法、美しく肯定的な含蓄に富む動詞の選択、隠喩の使用（罪は病氣、精神的不幸は墓、愛と恩恵は冠、魂の再生は飛翔する鷺の勢い）などの点で、文学的観点からも注目値に値する。5節では、「……してくださる方」という関係節の文型が連続したために、まさに単調に陥りかけたとき、詩人は、最後の行をそれに先行する行とは文法的に違う形にして、変化をもたせている。神がすべての動詞の主語であることは、何よりも、神が働き給うことを暗示する。神の働きの舞台は、ここでは、話手の個人的生活であり、出来事は、精神的性質をもつものであることを特徴とする。ここに列举された項目の背後にひそむもう一つの公理は神のあらゆる行為が、繁栄に満ちた状態を回復させ、また復帰させることを必然的に意味するということである。

6節から18節において、詩人は、彼の視野を広げて、神の恩寵を国の歴史や人間社会一般に見られるものとして叙述する。そこには私人としての話手から、社会一般の代弁者としての話手へと、外に向う動きがある。詩人は、最初に、歴史とは、正義の原理に従って機能する神の秩序であると次のように主張する——「主はすべて虐げられている人々のために／恵みの御業と裁きを行われる」（6節）。これよりも更に広い意味合いをもつ陳述として、「主は御自分の道をモーセに／御業をイスラエルの子らに示された」（7節）と続く。これを言い換えるなら、神は、自らを顕わされる神であり、しかも歴史の中に顕在化される神だということになる。詩人はまた神の赦しの特性を称賛し（8—10節）、先に、個人的な経験について述べたことを、共同体的文脈の中で繰り返しながら、神の寛容性を賛美する。神のこの特性に関する陳述は、初めは、肯定形で次のように述べられる——「主は憐れみ深く、恵みに富み／忍耐強く、慈しみは大きい」（8節）。次の節では、詩人は同一の真理を、否定形で述べる（9—10節）——

永久に責めることはなく

とこしえに怒り続けられることはない。

主はわたしたちを罪に应じてあしらわれることなく

わたしたちの惡に従って報いられることもない。

正反対の表現形式で均衡をはかろうとしたのは、まさに作者の芸術的本能といえよう。話手は、さらに、神の赦しの特性を、二つの顕著な空間イメージ、つまり一つは高さ、もう一つは水平的動きにからむイメージを使って、次のように描き進める(11—12節)——

天が地上はるかに高いように

慈しみは、主を畏れる者の上に大きい。

東が西から遠く離れているように

わたしたちの背きの罪をわたしたちから遠ざけてくださる。

第三の直喩は、家庭的世界から引かれたもので、非常に効果的に、神と被造物との親しい関係を肌で感じさせてくれる——「父がその子を憐れむように／主は主を畏れる人を憐れんでくださる」(13節)。

これに続くこの詩の展開部において、詩人は、神の愛を賛える方法として対比を用いる。彼はまず、人間のはかなさを描き(14—16節)、それを神の愛の恒久性と対比させる——「しかし、主の確固たる愛は、とこしえから、とこしえまで、主を畏れる人の上にある」(17節)。この詩人は、神の愛を、神の民に対する契約関係という文脈の中で定義

するように留意する。従って、神の愛は、「主の契約を守る人／命令を心に留めて行う人に及ぶ」（18節）ものと言われることになる。

この頌詩は、一連の頓呼法（オード・アポストロフ）を使って、法悦的な高まりのうちに終結しているが、それは同時に、頌栄（賛美への呼びかけ）ともなっている〔20—22節（訳者付加）〕——

主をほめたたえよ、御使いたちよ

主の語られる声を聞き

御言葉を行なう力あるものたちよ。

主をほめたたえよ、主の万軍よ

御旨を果たす主に仕えるものたちよ。

主をほめたたえよ、すべて造られたものたちよ

主の統治されるところの、どこにあっても。

わたしの魂よ、主をほめたたえよ。

この結論が含蓄するところは明白である。叙述されてきたとおり働き給う神は、応答と賛美を喚起するということがある。この詩の最終行は、すばらしい筆致であり、最初の行を繰り返すことによって、詩が包囲的構造からなり、完全無欠であるとの感じを与えている。第一行に盛られている感情を繰り返すことによって、詩編詩人は、瞑想が、どれ程多くの領域を占めていたかを読者に気づかせる。更に、詩の中間部において、闊達な表現、高揚した感情を味わ

わせたあと、再び静けさへと沈潜させ、最後に、個人的瞑想に至らせる。

詩編一〇七もまた、神を賛える頌詩であるが、ここでは、窮乏や苦難の中にいる人々を救出なさる神が賛えられる。この詩における基本的な対比は、人間の困窮と神の救済である。

この詩編の主要な修辭的特徴は、四つの話の連続性にある。その個々の話は、丹念に構想されたパターンに従って展開する。詩人は、荒野で苦しむもの（4—9節）、牢獄で苦しむもの（10—16節）、病いに苦しむもの（17—22節）、海上で危険に苦しむもの（23—32節）、に対する、神の救いを、次々と描いていく。各セクションとも、展開の仕方は同じで、まず悲惨な場面で幕開けする。第二段階は、どの話も、「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと／主は彼らを苦しみから救ってくださった」というリフレインの反復（6、13、19、28節）で構成されている。第三段階では、どれも、詩人が最初に人々の窮状を説明するのに用いた比喻表現を使って、神による救いを描いている。それぞれの短い話は、いずれも一定のリフレインに続いて、救いを神に感謝すべしとの呼びかけを行って終結している（「主に感謝せよ。主は慈しみ深く／人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる」——8、15、21、31節）。

これらの描写のなかには、困窮の本質に関して曖昧な表現が見られる。災難の場面は、文字通りの意味にも、また象徴的な意味にも、あるいはその両方の意味にも解釈できる。例えば、初めの部分にある荒地の心象は、人々が経験するどんな種類の苦しみを表わす象徴でもあり得るし、また、神がイスラエルの民を、荒野を経て約束の地へ導かれることを、かなり文字通りに描写したものであり得る。同様に、第二の話における牢獄の比喻表現は、同じ心象が精神的束縛を表わすものとして聖書の他の箇処に用いられているので（例えば、ルカ四・17—21節参照）、象徴的意味を持つと考えることができる。第三の話にでてくる病気については、その症状が現実に現われるものであるとはいえない（18節）、それがまた、人々の「罪の道」や「背き」（17節）にも関係があるので、文字通りとも、象徴的なものと

してもとれる可能性がある。我々のこれらの心象イメーに対する解釈がどうであろうと、詩人の描く一つ一つの描写が、災難に伴う基本的、原型的連想を喚起させることは確かである。

結論のセクション (33—34節) では、詩は、傲れる者への神の辱しめ (「主は貴族らの上に辱めはずかしを浴びせ」40節) と、貧しき者の救い (「しかし、貧しい者を悩みから高く上げ」41節) とを対比させている。栄える者の滅びを叙述するにあたって、詩人は、自然界から取り入れた悪魔的原型を用いる (33—34節) —

主は大河を荒れ野とし

水の源を乾いた地とし

住む者の悪事のために

実り豊かな地を塩地とされた。

これと均衡を保っているのは、喜劇やロマンスの原型にならって、幸せな黄金時代を描いている次のような場面である (35—38節) —

主は荒れ野を湖とし

砂漠を水の源とする。

飢えていた人々をそこに住まわせ

人の住む町を固く立てられる。

彼らは野に種を蒔き、ぶどう畑を作り

作物を実らせる。

主の祝福により彼らは大いに増え

家畜も減らされることはない。

この叙情詩は、読者に、これまで主張してきた真理に心を留めるように促し、終局にふさわしい調べをもって終る

——「知恵ある人は皆、これらのことを心に納め／主の慈しみに目を注ぐがよい」（43節）。

叙情詩が神を主題として扱う時、そのすべてが、これまで考察した頌詩ホードのように、その堅琴の調べを高く合わせるわけではない。神の性質や特質の一つだけについてただ瞑想するものも多い。その良い例は、神の永遠性を問題とした瞑想詩、詩編九〇である。ここで詩人は、詩の構造上の原則として、神の永遠性と人間のはかなさの対比を用いる。冒頭の文でこの詩のテーマを告げるが、それが祈りであることを明らかにしている——「主よ、あなたは代々にわたって／わたしたちの宿るところ」。神を住みかに喩えることは、民を庇う神の有り難い配慮を人々に実感として捉えさせると同時に、これに加えて神が「代々にわたって」避難所であったと考えることは、神の不朽の永遠性をすでに暗示するものである。

この詩は、瞑想的叙情詩として最高の出来である。詩が展開するにつれ、一つの精神が活発に働くのを目のあたりに見る。初め沈思的であったその精神が動的になり、関連性のある一連の思考を経過して進む。この一連の考えは、絶えず、前へと押し進む。その結果、今まさに思考と熟慮の過程にある話手を、我々が目撃しているということになる。

詩人はまず、神をただ昔から存在するものとして見るのではなく、創造という原初の業<sup>わざ</sup>よりもっと古くからいます方であるということを認めることから始める（2節）――

山々が生まれる前から

大地が、人の世が、生み出される前から

世々とこしえに、あなたは神。

次の節では、神は、その永遠性によって、他の被造物とも、人間とも異なるものとされるといふ考えが加えられる――  
「あなたは人を塵に返し／『人の子よ、帰れ』と仰せになります」（3節）。神の超時間性は二つの直喩によって次のように表現されている（4節）――

千年といえども御目には

すでにすぎた昨日のごとく

夜<sup>よまね</sup>回りのひとときのようにです。

一つの隠喩ともう一つの直喩が、神の至高の永遠性と比べた時、人間が、いかにはかなく、実体のないものであるかという考えをくり返して述べる――「あなたは人を掃き払う／彼らはあたかも夢のようなもの」（5節）。クライマックスにおいて人間の死ぬべき運命というテーマを述べるのに、自然から取られた拡大された直喩が使われる（5―6



あしたにもえでる青草のようです。

あしたにもえでて、栄えるが

夕べには、しおれて枯れるのです。

神の永遠性と人間の死ぬべき性質とを可能な限り対比させて後、話手は関連した一つの考えへと語り進める。神の永遠性は、人間の罪深さとも対比させることができるが、この人間の罪深さこそ、人間が死ぬべく運命づけられている究極の原因だというのである。この分析によって、このセクションの初めの二つの節(7—8節)で暗示されているように、人間と神との違いは、単に時間的なものではなく、霊的なものであることが明らかとなる――

あなたの怒りにわたしたちは絶え入り

あなたの憤りにおじ惑います。

あなたはわたしたちの不義を御前に

隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。

これに続く節(9—10節)では、人間の悲惨は、人間の罪に対する神の裁きに由来するという考えを繰返す。次に、死の定めと罪との関係に対する人間の無知を説明するために、修辭的疑問が用いられている――「だが御怒りの力

を知っているでしょう／だれがあなたをおそれる恐れにふさわしくあなたの憤りを知っているでしょう」(11節)。このセクシヨンの終りでは、かかる無知から解放されるべく、「それゆえ、わたしたちに生涯の日を正しく数えるように教えてください／知恵ある心を得ることが出来ますように」(12節)との祈りが発せられる。この「それゆえ」という言葉は、ここでは、先行の文に目を向けさせ、人間の罪深さに対する神の怒りにかんがみて、人々に自分の生涯の日を数えるよう(つまり、死に定められている運命を熟慮するよう)求めている。

瞑想は、神の永遠性を凝視することから始まり、人間の死ぬべき定めと、罪深さへの真剣な沈思へと進み、一連の祈願をもって終る。沈黙のくだりでは、樂觀論と悲觀論が入り混じり、神の至高の慈しみについての意識が、人間のもろさや人生の悲惨な有様についての暗黙の認知と釣り合いを保っている(13―17節)――

主よ、帰って来てください。

いつまで捨てておかれるのですか。

あなたの僕らをあわれんでください。

朝にはあなたの慈しみに満ち足らせ

生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください。

あなたがわたしたちを苦しめられた日々と

わざわいに遭った年月に応じて

わたしたちを喜ばせてください。

あなたの御業みわざをあなたの僕らに

あなたの威光を彼らの子らにあらわしてください。

わたしたちの神、主の喜びが

わたしたちの上にありますように。

わたしたちの手の働きを

わたしたちのために確かなものとし

わたしたちの手の働きを

どうか確かなものにしてください。

この箇処の言葉から連想される付帶的な意味やニュアンスは、この詩においてすでにその言葉がどのように用いられたかとの認識如何にかかっている。「朝には」満ち足らせてほしいとの神への祈りは、人は「朝が来れば」花を咲かせ、夕べには「しおれ、枯れて行く」草のようだけれどもという6節の陳述と切り離すことはできない。「生涯」(14節)にわたって喜び、楽しむ姿の描写は、「わたしたちの生涯は御怒りに消え去り」(9節)という先行の主張によって抑制を受ける。また、神の御業みわざが明らかに示されるようにという願い(16節)がなされる時、神の御業みわざは、人を塵に返し(3節)、掃き去られる(5節)という箇処が必ず想起されることになる。

詩では、しばしば、その核心を直接述べることなく、間接的に描く。詩編九一はその一例である。この詩は神を、神に信頼する者を守られる神として、間接的に特性づけている。とは言っても、この詩の表向きの焦点は、神にではなく、神を信頼する者に置かれている。神の特性が、信する者の生涯に起こることを通して、間接的に見られているのである。詩人の用いた主な技法は、短い、鮮明な実例と隠喩の目録を用いることである。想像力に溢れているため

に、この詩は「詩編」の中で、最高の部類に格づけされる。

この詩の冒頭は、神に信頼する者の持つ静かな確信を描く（1—2節）——

いと高き神のもとに身を寄せて隠れ

全能の神の陰に宿る人が

主に申し上げる

「わたしの避けどころ、わたしの<sup>とりで</sup>砦、わたしの神、依り頼む方」と。

神への信頼は、ここでは個人的な事柄（「わたしの<sup>とりで</sup>避けどころ」、「わたしの神」）として示される。最初の節に出てくる形容詞（「いと高き」、「全能の」）は、神の属性としてふさわしい神の支配権に注意を向けさせる。神の庇護のことを隠喩では、外部からの脅しから護る建物または洞窟、また太陽の光から人を覆い隠す陰として表わしているが、避けどころまた砦である神への言及は、もう一つの第三の経験領域、すなわち戦いのことを思わせる。

この詩のあとの部分は、この冒頭の叙述に論理的説明を与えるものである。即ち、冒頭には神に依り頼む者の属性である静穏な確信が述べられているが、その確信は神の御業<sup>みわざ</sup>を基盤とするものであることをその業<sup>わざ</sup>を列挙して説明する。神が「あなたを仕掛けられた畏<sup>おそ</sup>れから救い出してください」（3節）という言明は狩猟からの隠喩を用いているが、一方、「恐ろしい疫病から」（3節）の救出の予告は疫病や病という医学の世界へ焦点を移していることになる。また類比により、神を、保護する鳥として描いている——「神は羽をもってあなたを覆い／翼の下にかばってください」（4節）。次の行に至ると、<sup>イメジャリイ</sup>比喩表現は軍の場面<sup>いくさ</sup>に変わる——「神のまことは大盾、また小盾である」（4節）。続く二

つの節においては、夜間の救出と昼間の救出とが釣り合いを保っている（5—6節）——

夜、脅かすものをも

昼、飛んで来る矢をも、恐れることはない。

暗黒の中を行く疫病も

真昼に襲う病魔も

この箇処の最初の行は、闇に対する典型的な恐怖、それにおそらく悪夢からの解放を述べている。旧約聖書の中には、神の裁きを、災難をもたらす矢として描いている箇処が幾つかある（詩編三八・2、ヨブ記六・4、哀歌三・13）が、「昼、飛んで来る矢」という句は、軍に関係するものとも考えることもできるであろう。6節では疫病が擬人化され、獲物に忍び寄るものとして生き生きと描き出される。疫病はおそらく、さまざまな意味を表わすのに使われる。旧約聖書の二つの場合に、神が夜、命取りの疫病を送ったとある（出エジプト記一一・4—5、イザヤ書三七・36）が、詩編詩人は多分ここで、この二つの出来事か、あるいは類似した歴史上の事件をほめかすつもりであろう。また、この詩行が、疫病の蔓延は悪い空気や悪臭のせいであり、閉め切った部屋においては特にそうであるとする昔の医学的見解を表わしていると考えられることも可能である。「真昼に襲う病魔」（6節）とは日射病であることは疑う余地がない。この詩のあとの節で、詩人は誇張法を使って出来事を述べるが、それは、明白な事実を伝えるのではなく、感情の真実を表現し、神を信ずる者なら誰もが経験できる確信を力強く表明するためである。まず初めに戦いの場面に関連して述べる（7—8節）——

あなたの傍らに一千の人

あなたの右に一万の人が倒れるときすら

あなたを襲うことはない。

あなたの目が、それを眺めるのみ

神に逆らう者の受ける報いを見ているのみ。

同様に、「あなたには災難もふりかかることがなく／天幕には疫病も近づくことがない」(10節)との陳述は、強い感情を伝えるために用いられた誇張的表現である。これに続く描写についても同じことが言える(11―13節)――

主はあなたのために、御使いに命じて

あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。

彼らはあなたをその手にのせて運び

足が石に当たらないように守る。

あなたは獅子と毒蛇を踏みにじり

獅子の子と大蛇を踏んで行く。

これらの奇蹟的な出来事は、信仰者の通常の経験ではない。しかしそのことは、事実ではなく感情を伝えるよう意図されている叙情詩においては問題外のことなのである。

この詩の結びの言葉は神の口を通して発せられる。それは、以前に人間の視点から提示されていたのと同じ真理を主張しているもので、神は、神に信頼する者を守られるという真理である（14—16節）——

「彼はわたしを慕う者だから、彼を災いから逃れさせよう。

わたしの名を知る者だから、彼を守ってあげよう。

彼がわたしを呼び求めるとき、彼に答え

苦難の襲うとき、彼と共にいて助け

彼に名誉を与えよう。

生涯、彼を満ち足らせ

わたしの救いを彼に見せよう。」

詩編三二は、神のことを扱っている大低の叙情詩と同様に神の特性と働きの一つの様相を取り上げ、神の赦しのみに集中する。この詩全体が、罪と赦しの間の緊張関係を土台としている。基底には念入りの対句法パラレリズムが見られ、冒頭でテーマを述べる二つの至福のうち、初めの一つは肯定語法、次には否定方式が用いられている（1—2節）——

いかに幸いなことでしょう

背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。

いかに幸いなことでしょう

主に咎<sup>とが</sup>を数えられず、心に欺きのない人は。

叙情詩は個人的経験の表現である。従って叙情詩人はしばしば彼の主張を、彼自身の観察と経験に訴えることによって確実なものとする。詩編三二は叙情詩のこの傾向を例証するものである。詩人は冒頭の主張を、論理的議論によってではなく、彼自身の生涯に起った一つの出来事を語ることによって立証する。まず初めに、悔い改めることをしなかった罪の作用を、絵のように鮮やかに描いている（3—4節）——

わたしは黙っていたときには

絶え間ない呻きに骨まで朽ち果てました。

それは、御手が昼も夜もわたしの上に重く

わたしの力は夏の日照りにあつて衰え果てたからです。

この描写は、話手の苦しみの感情的感覚を伝える誇張表現であるか、罪がもたらした心身症的な病いを事実在即して説明しているものであるかどちらかである。この話の第二段階では、話手の告白と回復が描かれる（5節）——

わたしは罪をあなたに示し

咎<sup>とが</sup>を隠しませんでした。

わたしは言いました、「主にわたしの背きを告白しよう」と。



そのとき、あなたはわたしの罪と過ちを赦してくださいました。

詩人は、自らの個人的経験の基礎の上に、すべての信仰者に当てはまる一般化の方向へ話を進める。ここで詩人は、考えを美しく飾るために、自然からとった一つの隠喩を用いている（6節）――

このゆえに、神を敬って生きる人は皆

あなたに祈ります。

大水が溢れ流れる悩みの時にも

その人に及ぶことは決してありません。

すべての信仰者に対する一般的な原理として主張することを、詩人は自らにも適用し、彼の確信を軍事上の言葉を用いて表明する（7節）――

あなたはわたしの隠れ家

苦難から守ってください方。

救いの喜びをもって、わたしを囲んでくださる方。

この詩は読者に、これまで述べられてきた知恵に留意し、神の慈しみを喜ぶように勧める教訓的な調子で終わっている

(8—11節)。

「詩編」における神は断然、礼拝において出会われる神である。詩編九五は「詩篇」におけるこの鋭い指摘を要約して述べている。この詩において最も興味深い箇所は、詩人が神を礼拝するよう呼びかける論理的根拠を明らかにしている動機付けのセクションである。要するに詩人は、神は神であるという理由のゆえに礼拝されるべきであると主張する——「主は大いなる神／すべての神を超えて大いなる王であるから」(3節)。詩人は神の支配の領域を詳細に述べることによって、神が全世界の王であるという陳述を敷衍するが、そこで彼は、「深さ」と「高さ」、また「海」と「陸」という、釣り合いのとれた心象<sup>イメージ</sup>を用いている(4—5節)——

深い地の底も御手の内にあり

山々の頂も主のもの。

海も主のもの、それを造られたのは主。

陸もまた、御手によって形づくられた。

この詩のもっとあとで、礼拝に対する第二の論理的根拠が提示される。ここで強調されているのは、神と神の民との契約関係である。その関係は田園詩の比喻表現<sup>イメジャリ</sup>によって描かれている(7節)——

主はわたしたちの神

わたしたちは主に養われる牧の群

御手の内にある羊。

「詩編」の神について、若干の結論的な概括をすることができる。神はなかんずく、業<sup>わざ</sup>をなさる方である。その神の御業<sup>みわざ</sup>は、「詩編」の詩人が経験的に語る言葉によって証明される。神は、自ら創造された世界を越えて遙かに高くいます超絶的な方であると同時に、造られたものの中に起こる事柄の一要素でもあり得る内在的な方である。また彼は倫理的な神であって、常に正義と悪に関心を寄せる。その関心は二元的な表われ方、すなわち、罪に対する怒りの裁きにおいてと同時に、従順に神に帰る者に対する憐れみと赦し<sup>ゆる</sup>をとおして示されるのである。

(つづく)